



Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 92
Issue Date	1936
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/77668">http://hdl.handle.net/2115/77668</a>
Type	column
File Information	A018_02_03all_Part28.pdf



[Instructions for use](#)

# 各務時報

昭和十一年

## 芒亭書屋談叢

奈良の盆地の村では小字又は其以下の部落を垣内と云つて居るところが多い。垣内は聚落の外貌も一塊となつて居るが、其内の人々の社會關係も強固な集結をなして居る。此垣内には太神宮さまがどこでも祀つてある。垣内は太神宮様の崇敬者の集團だと見る事が出来る。だから太神宮さまは云はば垣内の客觀的標識である。然し太神宮さまと云ふのは社殿もなく只一基の石燈籠があるばかりで、石燈籠一つが太神宮さまの全部で外には何も無い。此石燈籠に夜毎に垣内の内の家から順番にお燈明をあげる。一年中缺かす事はない。此習慣は餘程昔から傳はつて居るらしいので恐らく何百年以來つづけられて來たのだらうと云はれて居る。私が見た或る太神宮さまの石燈籠には天正頃の年號の銘あるものがあつた。三百年以上の齡をもつて居る。昔は油皿に容れた燈心をともしたださうである。其後日本蠟燭の時代を経て今では小さな西洋蠟燭を用ひて居る。

私は先年奈良の村を調査に行つた時、或る垣内の太神宮さまの側に立つて右の様な話を聞いて思はず心をうたれた事がある。何百年も續いて來た垣内の生命の心臓の鼓動にでも觸れた様な心地がしたのである。

春風秋雨三百年、村の内戸毎の浮沈、一村の盛衰、世の様々の出來事、それ等のものをよそにして垣内の人々の此約束此法規は嚴乎として存續して來たのである。守られる法規の内容、信ぜられる信仰の内容がよしどんなものであらうとも、守る態度信する態度の嚴肅さに私等は屢々頭を下げる事があるものである。

どこの垣内の石燈籠も永い間のお燈明の煙で随分黒くなつて居た。其どこかに垣内の歴史や家毎の歴史が一つ一つ刻み込まれて居る様な心地がした。今夜お燈明をつけに行くとどこかの家の小娘は、其何百年前の先祖の人の顔も心も知らう筈はない。風俗慣習生活の態度あらゆるものが幾多の變遷を経て居るであらう。だが遠い先祖の生命が今の人の肉體に生きて居る様に先祖の心も今の人の心に生きて居る筈である。

夕闇の内にすつと遠方の垣内の太神宮さまのお燈明を幾つも見えた。垣内の生命の火を見る様だつた。

我々の學園には新しい同行が又やつて來た。學園は云はば一つの垣内である。一人びとりの心の惱み心のおごりは様々であるであらうが、學園の生命の火は永遠にともして行かなければならぬ。(芒亭)

習 = 實 = 場 = 農

てて出を塔の牙象

[化]・[體]・[具]

崇高深遠なる學理と斬新にして合理的なる技術を習得して「明日の日本の農業」を背負つて立たうとする我等若人——ひごろ教はりし高説達見を應用實行せしめんとする指導者たる立場に置かれたる時如何にせば、天狗連の多い農村人、時代の歩みと共にし得ない保守的な氣持の多分にある人々を経済的に救ひ得るか。

若草の芽の出る時のやうな生き、とした學問をしておくことが、どんなにか利益を與へるであらうか、とかねて考案中であつた農學科三年の農場實習を新入生の指導に向けることゝなつた。

之に就いて農場主事岩城教授を訪へば「高等農林を卒業すればもう相當な地位に於て農村を指導して行かねばなりませんから指導者となつた時如何に習得したものを生かして行くかと云ふことは一朝時に解るものでないと考へます。農學科一、二年の教課で大體の處農業に對する目安はついたと思ひますから三年の人に一週二回程交代で新入生の指導をやつてほしいと思ひます。自分が指導者になり自分の設計なり栽培法なりが如何に作物に反應したか、又人を指導することに依り如何に自己が指導される事になるか目に見えるだらうか考へます」と語られた。

昭和十一年四月三十日印刷  
行發日 一月五年一十昭和

發行所 野大書局  
地址 東京市七軒町二十番地  
印刷所 田河貞次郎  
地址 東京市七軒町一十番地  
社會式株樹市濠西 所刷印  
店支草龍